

# 家出少女の奇妙な日常

アッシュクフォルダー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

今川詩織は、親との生活を嫌がり、ケンカした挙句、神山高校の制服を着たまま、家出した。

そんな中、男子高校生の高坂風太郎に拾われて、居候することになり、

家事手伝いを条件に、高坂家に住むことになったのだった。

そんな、高坂風太郎と今川詩織、

そして、妹の高坂恵梨香の三人での共同生活が幕を開ける！

プロセカ小説シリーズ 第十弾です。

## 目次

第一話	女子高生を拾う	1
第二話	居候することによ!	4
第三話	神山高校の入学式とクラス発表	8
第四話	化学教師は変人だ	11
第五話	文化祭にイベントに	14
第六話	始まりの朝	17
第七話	神山高校 文化祭	20
第八話	放課後の一時	23
第九話	朝と夜の一時	26
第十話	三人でデート!	29
第十一話	五人が出会う時	32
第十二話	五人で女子会デート!	35
第十三話	昔の杏と遥	38
第十四話	日常の崩壊	41
第十五話	風太郎と詩織	44
第十六話	本当の共同生活	47
第十七話	遥とみのりとデート	50
第十八話	詩織とみのりのデート	53

## 第一話 女子高生を拾う

私の名前は、今川詩織

1月1日生まれのO型 身長158cm 体重45kg  
スリーサイズは、82―56―86

今年の春、都立神山高校の全日制に合格した、高校一年生  
なんだけど、両親や兄との仲は不仲で、

散々揉めた挙句、神山高校の制服を着て、

家出を決意、気が付けば、夜の10時

私は公園で野宿して、一晚寝ようとしたけど…

「こんなところに、女子高生…？」

おい、早く家に帰れよ」

「はい？」

「夜道に女の子が一人でいたら、襲われるよ？」

「いいの、私、家出しているんで」

「は？」

「ねえねえ、名前は？私は今川詩織」

「俺は高坂風太郎だ」

「ねえねえ、風太郎くん、

家に泊まらせてくれない？」

「はあ？」

「だから！一晚だけ！家に泊まらせてくれない？」

「そ、それは…」

「お願い！この通り！何でもするからさ！」

「無理な願いだな…友達の家に行ったのか？」

「ううん、友達いないもん、イジメられていたから」

「じゃあ、親に連絡するか？」

「親はもつとダメ、パパもママも、お兄ちゃんも…

みんな、大嫌いだし…」

「色々と訳アリだな…」

えっと、詩織だっけ？神山高校の子か？」

「うん！見ての通りだよ！風太郎くんは？」

「俺は、神山高校の夜間定時制の二年生だよ」

「じゃあ、同じ、神山高校だね！」

「全日制と夜間定時制だから、違うけど…」

「全日制の子だったのか…」

「そだよ！あー寒い！ねえ、風太郎くん、

「一晩だけ、泊まらせてよ！」

「わかった、わかった、

「じゃあ、一晩だけだぞ？」

「後は、警察に引き渡すから、

「いいか？これは、誘拐じゃないからな！」

「はーい！」

（威勢のいい奴だな…）

その後、俺は親がいないことをいいことに、詩織を一晩だけ止まらせることになった。

「アンタ、この女誰？」

高坂恵梨香、俺の妹だ。

宮益坂女子学園 高等部の一年生で、

文武両道で、容姿端麗といった、

非の打ち所がない美少女といったところである、

俺は、そんな、優れた妹にコンプレックスを持っているが、

それは、また、別の話とする。

「今川詩織です！今日から、お世話になりまーす！」

「おい、一晩だけといったはずだ」

「どういうこと？」

「ちよつと訳アリで、一晩だけ、泊まらせることになって…」

「勝手にすれば？どーせ、一日だけでしょ？」

「えー」

「じゃあ、俺、夕飯の支度するから」

「あつ、やらせてください！料理上手なんです！

得意なんです！」

「ふーん、じゃあ、なんか作ってよ？」

「足りなかったら、買いに行くし」

「冷蔵庫の中見てみたけど、肉じゃがが作れそう！」

「人の冷蔵庫、勝手に見るな！」

「よーし！今日は肉じゃがだ！」

「へいへい」

詩織は肉じゃがを作るのであった…

「美味しそう…」

「どーせ、不味いに…!？」

「美味しい！お母さんより、上手かも？」

「えへへ…！料理は自分で作る事が多くて…」

「それは、いいとして、

三日後には、神山高校の入学式だぞ？」

「これから、どうするつもり？」

「三日後まで考える！」

「能天気な奴だな…」

こうして、俺が拾った女子高生との、奇妙な日常が、  
始まるうとしている…

## 第二話 居候することには?!

高坂風太郎は、今川詩織に色々と問いかけるのだった。

「どこから来た?」

「東京近辺だよ?」

「じゃあ、明日、お前を警察に引き渡す、いいな?」

「それは、勘弁してほしいな」

「じゃあ、ネットカフェでカラオケに行くしかないな」

「お金ないの: 気が付いたら、五十円玉一枚しかなかったの」  
「:」

「だから! お願い! しばらく、泊まらせて! この通り!」

「: じゃあ、家事やってくれるか?

俺と恵梨香の代わりに」

「うん! 家事は得意だから!」

と、満面の笑顔を、こちらに、向けるのだった。

「でも、知らない人の家に、行こうとするなよ、

碌な目に遭わねーからな!」

「でも、風太郎くん、親切だったじゃん!」

「: とにかく、寝るから、おやすみ」

「おやすみ!」

翌日!

「風太郎さん! 起きてください! 朝ですよ!」

「俺は、朝起きるのが苦手なんだ:

大体、夜間定時制だし:」

「そんなの、関係ないよ!

だって、今日は日曜日だし!」

「そっか、全日制の子の入学式って、火曜日からか:」

「そだよ! じゃあ、寝ている間に、

しておいて欲しいことある?」

「朝ご飯の支度でもしといて、みそ汁が飲みたい:」

「うんっ！とびつきり、美味しい、みそ汁作るから！」  
「期待してねーけど」

朝9時半になり、ようやく、起きるのだった。

そして、机の上に置かれたのは、

ごく普通の味噌汁だった。

ゴクリ…

「美味しい！何て言うか、素直に言っつて、美味しい！」

「兄ちゃん、大袈裟すぎ」

「えへへっ！一番の自信作なんだ！」

腕によりをかけて作ったからね！」

「はあ…どーして、こんなことに…」

「ねえ、襲ったりしないの？」

「しねーよ！バカか？」

もし、仮に襲っていたら、俺は逮捕されているし！」

「だよねー！風太郎くん、優しいんだもん！」

「はあ…どの口が言ったことか…」

んで、これから、どうするの？」

「うーん、この家に居候する！」

「バカ言え！親が心配しているぞ！」

「大丈夫、親は私がいなくなって、

清々していると、思うんだ…」

「あっ…」

俺は過去の記憶を思い出した、

俺がいなくなつて、みんなが、清々していた、

悲惨な過去…どうして、脳裏に、浮かんだんだ!?

「どうしたの？」

「追い出したら、どうするの？」

「次の家を探すかな？」

私、お金、五十円しかないし、

上手いことやって、誰かの家に…」



「上手いこと出来るのか?」

「えっ?」

「言いたくないこと、やるなよ」

「ざげんなよ、こいつ、一応、恵梨香と同じ、

女子高校生だぞ

もつと普通に青春して、

もつと普通に恋をして、

もつとバカみたいに笑うのが、

青春なんだ、

アオハルさせねーと、

って、何考えているんだ!?

俺は思わず叫ぶのだった…

「金もない!住む場所もない!

だから、男を誘惑させようなんて、

バカみてーだよ!」

「でも、私、家事しか取り柄が無いし…」

「じゃあ、住めよ、居候しろよ…」

「えっ?」

「だから!普通の、そーゆー考えにならないんだ!

バカだ、アホだ!

物の価値の分からない、甘ったれめ!

だから…」

落ち着いた口調に戻して…

「俺がお前の思考を叩きなおしてやる!

20歳になるまでな!」

「私、15歳だよ!」

「わかってるよ!親なんて、海外で暮らしているから、

実質、三人暮らした」

「じゃあ!尚更だね!」

「変な事したら、警察に引き渡すからな」

「はーい!」

「はあ…」

こうして、家出少女と妹との、  
奇妙な共同生活が、幕を開けようとしていた！

### 第三話 神山高校の入学式とクラス発表

火曜日になり、今日は、都立神山高校全日制の入学式だった。

「今日は、神山高校全日制の入学式だろう？」

「うん、そうだよ？」

風太郎くんは、夜間定時制だったよね？」

「そうだけど？」

「じゃあ、入学式に来ない？」

「遠慮しとく」

「ふーん」

そして、詩織は早速

神山高校の門に一步 足を踏み入れるのだった。

「よーしー！今日から、女子高生！」

いっぱい、勉強して、

いっぱい、友達作るぞー！

だって、全日制だもん！

定時制でも、通信制でもないからね…

可能性いっぱいあるよね？」

詩織は、クラス表を見るのだった。

「えつと…今川詩織は…あった！」

1年A組出席番号2番なんだ！

神山高校 全日制 1年A組 出席番号2番 今川詩織！

うーん！いい響き！」

入学式を終えた後、詩織は、1年A組の教室へと向かうのだった。

担任の山下次郎先生が、26人の生徒たちに挨拶をした。

「えーみなさん、今日から、

このA組の担任になることになりました、山下次郎です、  
担当は化学です。よろしくお願いします。

では、出席番号順に、自己紹介をしていくから、  
暁山瑞希さんから、お願いします」

「暁山瑞希です。よろしくお願いします」

「え？それだけ？」

「それ以外に、何言う必要ありますか？」

「うーん、そうだな、じゃあ、好きなこととか！」

「うーん、ボクの好きなことは、

フアッションかな？」

「ふーん、フアッションね」

「もう、いいですか？」

「うん、ありがとう。」

次、今川詩織さん」

「今川詩織です！」

えっと、特技は料理と洗濯と掃除です！」

「家庭的だな」

「えへへ、よく言われるんです」

「そうなんだね、じゃあ…」

次々と、自己紹介は進んでいき…

「じゃあ、次、白石杏さん」

「白石杏です！よろしく！」

特技はダンスと歌うことです！

いつか、最高のイベントライブを開くことを、

目標にしています！よろしくお願いします！」

「いい目標だね、じゃあ、次は…」

こうして、26人全員の自己紹介が終わるのだった。

「それじゃ、クラス自己紹介は、これで終わりにしまして…  
今日は、解散します」

放課後

「ふう〜終わったー」

「君が今川詩織さんだね？」

「そうですけど？キミは？」

「僕は矢坂悟志だ、この学校の学級委員長だから、

困ったことがあったら、相談に乗るよ！」

「うん！ありがとう！矢坂さん！」

「あつ、ちよつと、話さない？」

「もう少し、夜間定時制の子達の時間だから、

ここは、場所を変えようか、どこがいい？」

「うーん、公園！」

「わかった」

二人は公園に向かうのだった。

「ねえ、今川さんって、家事全般が出来るんだよね？」

「そうだよ！もう、得意だよ！」

「じゃあさ、俺に家事のやり方、

教えてくれない？ネットで調べても、チンプンカンプンで…」

「いいよ！よーし！張り切っちゃうぞ！」

「ありがとう、お兄ちゃんも助かるよ」

「お兄ちゃん？」

「あつ、俺には兄貴がいてな、

矢坂仁志っていうけど、兄貴は、

神山高校 夜間定時制の2年C組に在籍しているんだぜ？」

「そーなんだ」

「じゃあ！これから、よろしく！」

「何かつたら、また、学校で！」

悟志と友達になった気がする…

## 第四話 化学教師は変人だ

神山高校 全日制の学校生活が始まって、早、二週間、クラスにだいぶ馴染めてきたけど、担任の先生である、化学の山下先生はなんとというか…変わった人だ。よれよれの白衣に洗濯バサミで止められたネクタイ。

高い身長は猫背で隠れている。

じろーちゃんと生徒から呼ばれることに怒りもせず、

案外適当な先生かと思えば、

意外なことにも授業はともわかりやすかった。

そんな先生に質問をしに行ったとき、

彼の城とも言える化学準備室で彼は桜を眺めていた。

ノックの音に振り向けば少しだけ残念そうな顔をして、すぐそれを隠した。

「あつ、山下先生！」

「おつ、えつと…今川さんだったっけ？」

「はい！出席番号2番、今川詩織です！」

「ご丁寧に、なりよりだ」

「えつと、山下先生、相談事があるんですけど？」

「えー何で、俺？」

「俺じゃ、あんまり、頼りにならないぞ？」

「担任の先生ですから、しっかり、してください！」

「まあ…うん、わかった、それで、相談って？」

「悟志君を助けてやりたいんです」

「悟志で、出席番号26番の矢坂悟志のことか？」

「はい、彼は料理を教わりたいようで」

「なんで、家庭科の先生に、言わない？」

「だって、山下先生、自己紹介の時、

ネコカフェ巡りが趣味で、料理が得意って言いましたよね？」

「まあ…それも、そうだけど…」

「じゃあ、悟志君の為に、料理を教えるのは、どうですか？」

「うん、わかった、暇な時に、教えてやるよ」

「ありがとうございます！」

「そんな、大したことじゃないから…」

料理といつても、一人暮らしが、長いだけで…

もう、三十路だしな…」

「そうなんですネ！」

「そこ、ハッキリ言うか？」

「あつ、すみません！」

えっと…失礼します！ありがとうございます！」

「へいへい」

A組の担任を務める、山下次郎先生は、

周囲から、(じろー先生) 或いは(山下先生)

と、呼ばれているが、私は後者の方で呼んでいる。

一見、気だるそうに、頼りなく思えるが、

それでも、生徒一人一人に対して、

ちゃんと、向き合つて、見捨てずにいる部分が、

尊敬する部分である。

こうして、その後、高坂家に私は帰るのでした。

「おかえり、詩織、どうだ？」

全日制の学校生活は？」

「もう、最高だよ！毎日が、本気で楽しい！」

って、思うくらい！」

「お前は、本当に素直だな、

俺みたいに夜間定時制に通っている奴等は、

やる気なくてさ、

それでも、うちの学級委員長の神崎アオイさんが、

どうにかしているけど」

「こつちも、大変だね…」

「ああ、俺なんか、勝手に学級副委員長に、  
任命されたし…」

「頑張っつてね！」

「お、おう…」

全日制と夜間定時制、  
それぞれの、学校生活も、始まったばかり…



## 第五話 文化祭にイベントに

五月に入り、ゴールデンウィークが明けた後になり、都立神山高校 全日制は、恒例の学園祭が、開かれようとしていた。

学級委員長の矢坂悟志が、第一声を放った。

「みんな！ いよいよ、神山祭が、始まる！」

クラスの出店は、焼き鳥でいいか？」

「それでいいと思います！」

「じゃあ、各地、持ち場に着くように！」

「はいっ！」

そして、担任の山下次郎先生が…

「えーそれでは、A組の出し物は、

焼き鳥に決定したことを、ここにお伝えします、

もうすぐ、神山祭ですが、

先生的には、これで、いいと思いますので…」

「そ、そうですか…」

あつさりと、終わった、文化祭の出店、満場一致で、焼き鳥になったのだった。

「ねえねえ、詩織って、部活とか、入らないの？」

そう言ってくれるのは…

同じクラスの、田中奈美

入学してから、私と仲良くなっている子です。

「うーん、特に興味ありそうな、部活は、

なかったからなー」

「じゃあ、料理部に入らない？」

詩織って、料理上手だって!？」

「それもそうだけど…でも、今は、

自由に青春がやりたいから！」

だって、全日制高校だもん！

定時制でも、通信制でもない、

普通の高校って、憧れていたんだよね…」

「中学や小学校の時は？」

「公立の小学校と中学校だったけど、

あまり、いい思い出が無くて…」

「そーなんだ」

「でも、全日制高校って、

最高に青春が楽しめるから、いいんだ」

「へえくそう感じるんだね」

「うん」

「じゃあ、私、もう、帰らないと！」

「うんっ！じゃあ、また明日！」

「うんっ！」

何でだろう…全日制高校って、

どうして、こんなにも、楽しんだろう…

帰り道

「ふうく疲れたなーあれ？ここに居るのは、杏？

話しかけてみよう！やっほー！杏！」

「あつ、詩織！今、帰り？」

「うん、文化祭の議題が、終わったから、

ひと段落したよね、

あつ、隣にいる、女の子は？」

「紹介するね、小豆沢こはね！

アタシの大切な相棒なの！」

「は、初めまして…小豆沢こはねです…」

「よろしく！私は、今川詩織って言うんだ！

杏の友達！」

「ねえ、詩織、アタシここはねの歌、聴いてみない？」

「うんっ！聴きたい！聴かせて、聴かせて！」  
「じゃあ！いくね！」

こはねと杏は、詩織の為に、歌うを歌うのだった。

「すごい！すごい！」

杏って、歌上手なんだね！」

「こはねと、一緒に歌っているからね！」

あつ、詩織も、文化祭の後、イベント観に行かない？」

「イベント！面白そう！私も観に行きたいな！」

「じゃあ、これ！メモ用紙！」

「ここに、概要が書かれてあるから！」

「うんっ！ありがとう！楽しみにしておくね！」

楽しみが一つ、二つも、増えるのだった。

## 第六話 始まりの朝

5月17日、今日から、19日にかけて、  
神山高校は、文化祭を開く、出し物や見世物が沢山あって、  
よりいっそう、賑やかになるのであった。

「あつ、風太郎さん！おはようございませう！」

「はよ…ふわあくねみい〜」

「もうー！今日は文化祭ですよ！」

私、結構、張り切っているのー！」

「文化祭？ああ、全日制と夜間定時制の

合同文化祭だろ？」

俺は、行かねーけどな」

「どうしてですか？」

「その日、三日連続、バイトがあるから、

高坂家は、俺のバイト代と親の仕送りで、

生計を立てているから、余計なの、買うなよ」

「はーい！わかりました！」

じゃあ、私、美味しいみそ汁作るね！」

「勝手にしておけ」

高坂風太郎は、ソファアで、寝転んでいた。

「よーし！風太郎さんの為に、

朝ご飯作るぞー！」

「おはよー」

「あつ、恵梨香ちゃん！おはよう！」

「朝ご飯作っているの？」

そりゃー助かる、アタシもお兄ちゃんも、料理、下手だし…」

「お任せください！私！お料理得意なんです！」

「そう言えば、聞いていなかったな、

詩織って、どうして、料理得意なの？」

「親が作ってもらえなかったんです、

それで、自分で、親のお金を盗んで、

自分用の食材を買っては、料理していたんです。

それで、だんだん、だんだん、料理が上手になったんです」

「へえ、そうだったんだ…」

「親が家事を全然していなかったんで…」

それで、自分で、家事をするようになったんです」

「でも、やっぱり、詩織の親、心配しているだろう？」

警察に捜索届とか、出しているんじゃないのか？」

「それは…きつと、無いと思います、

だって、親は私を必要としていないから、

今が良いんです、風太郎さんに、恵梨香ちゃん、

それに、杏ちゃんに、瑞希ちゃんが、

いてくれたら、私は幸せですから…」

あつ、宮女で、こはねちゃんという、友達が出来ましたよ！」

「それは、よかったな…って、そーゆー問題じゃない！」

俺は、お前の親じゃねーから！」

「それも、そうですけど…」

あつ、制服のアイロンがけしておきましたよ！」

「大きなお世話だ！」

何だろう…詩織を見ていると、

俺が保護者になった気分だ…

一個しか、年齢違うけど（俺の方が一つ上）

きつと、もつと素直で、笑い顔が似合う、女の子だ、

でも、性格は酷く甘ったれで、

そこに付け込んで、彼女の価値観を捻じ曲げた大人達が、

環境が、絶対にあつたはずだ。

「おい、詩織、そんなに、呑気に朝ご飯作っておいて、

大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ！私、朝は、5時に起きますから！」

「早すぎだろ…」

詩織は、風太郎と恵梨香の朝食を作るのだった。

「相変わらず、出来の良い、美味しさ…」

「ふっふーん！もつと、褒めてもいいんだぞ？」

「そういう問題じゃない」

「じゃあ、二人とも！私は文化祭に行ってくるので、

じゃーねー！」

「へいへい」

詩織は風太郎に見送られながら、

家を出ていくのだった。

## 第七話 神山高校 文化祭

今川詩織は、白石杏と暁山瑞希に出会った。

「やつほー！杏！」

「あつ、瑞希！それに詩織まで！」

「あれっ？このTシャツは？」

「文化祭のTシャツだよ、クラスのみんなで作ったの、お揃いで着ているの、

あつ、瑞希と詩織の分もあるよ？

持ってこようか？」

「ボクは、いいや、着替えるの面倒だし」

「私は：一枚だけ、貰っておこうかな？」

「じゃあ、詩織のTシャツ、後で持っていくからね。

じゃあ、文化祭、見て回ろう！」

こうして三人で、見て回ることになった。

「どこも、賑わっているね〜」

「杏の言っていた通り、模擬店もたくさんあるみたいだね」

「うちの学校の文化祭って、来場者が、結構多いよ？」

「あつ、わたあめもあるよ！買いに行こうよ！」

「うんっ！いいね！じゃあ、行こ！」

三人で模擬店を回るのだった。

「は〜模擬店、沢山回れたね〜お腹いっぱい！」

「そうだね、さて、そろそろ、クラスの方にも：」

すると、こはねがやって来た。

「あつ、杏ちゃん！それに：詩織さん？」

「あつ、こはね！来てくれたんだね！

来られないかもって、言っていたから、

少し心配しちゃった！」

「えへへ、宿題していたからね」

「あ、もしかして、キミって、杏が、

いつも、話している、小豆沢さん？」

「そう！私の大事な相棒！」

「は、初めまして、小豆沢こはねです…」

「初めまして〜！ボクは暁山瑞希だよ！」

よろしくね、こはねちゃん！」

「私は今川詩織！改めて、よろしくね！」

「は、はい…よろしくお願いします！」

「じゃあ、四人で一緒に回る？」

「あーボクはいいや…詩織と一緒に回っておくね」

「私はいんだけど…」

「じゃあ、二手に分かれよう！」

後で合流しよーじゃあね！」

「こはねちゃん！また、遊ぼうね！」

「う、うん…」

「ひよつとして、瑞希と詩織って、気を使ってない？」

「えっ？」

「あたしとこはねだけで、行かせようとしているじゃん」

「まあ…それも、そうね…」

「まあ、それでも、いいよ、

なんか、変な会話になっちゃったね…

じゃあ、あたしは、こはねと一緒に回るから、じゃあね！

また、後でね！」

「うん」

瑞希と詩織は、廊下を歩いてた

「あつ、あそこにいるのは、ひよつとして、

絵名の弟の、東雲彰人くんかな？」

「どうして、知っているの？」

「絵名が、前に弟がいるって、話したことがあるから、

そうかもねーって、思ってた！」

「え？絵名は、確かに姉だけど？」

「ホントに？弟くんも、神高だったんだね〜」



「しかも、あのお化け屋敷のクラスの子だったら、私や瑞希と同じ学年だね！」

「そーなるな」

「同じ年って、知らなかったなー」

「教えてくれればよかったのに…」

「それで、君達は？」

「ボクはA組の暁山瑞希、

んで、こっちは、今川詩織！」

「絵名とは…まあ、深い仲って感じかな？」

「あ、隣のキミは？」

「B組の青柳冬弥だ」

「じゃあ、冬弥くんだね、二人ともよろしく」

「弟くん…」

「こうして、詩織と瑞希は、

彰人と冬弥と知り合うのだった。

## 第八話 放課後の一時

今日の放課後を楽しみにしていた、今川詩織。

そんな、彼女は、杏と瑞希の元へとやって来た。

「瑞希！詩織！早く行こうよー！」

私をそう呼ぶのは、クラスの中でも、特に仲良しの友達、

白石杏

そして、もう一人は、暁山瑞希。

二人とも、仲良くしている友人である。

「ごめん！今行くー！」

「詩織は、わりと支度が遅いよね」

「瑞希、ごめんってば！」

そして、帰りの支度を終えて、

私と瑞希は、杏の元へと向かった。

「ねえ、今日は、どこか行く？」

今日、遊びに行こうよ！と、誘ったのは、

白石杏であり、私たちは、誘ったり、誘われたりしている。

そうやって、放課後を満喫しているのだ。

大体誘った人は、何か魂胆があるはずだ。

「それは、着いてからのお楽しみ〜！」

ほら、早く行くよー！」

「うんっ！」

「あつ、クレープ屋さんに、新作があるみたいだよ！」

「食べない？」

「うん！食べたい！」

「ボクも！」

こうして、辿り着いたのは、クレープ屋さん

「詩織は、何にする？」

「うーん、どれも、美味しそうだからな…」

「ボクも…迷っちゃうな…」

そして、三人は、クレープを買った後、

近くの公園で、クレープを食べていた。

暇な時は、よく、この公園で暇潰しをするのだ。

「おいしい〜！ほら、詩織も食べてみなよ！」

「こういう味、ボクも好きだから、詩織も食べてみなよ」

「このクレープ屋さん、盛り付けが結構、いいんだよね〜」

「詩織！あーん！」

「ほら、こっちにも、あるよ〜」

「ひよつとして、からかっている？」

「あちゃ…バレた？」

「だって、詩織が、どっち食べようか、

迷っている時、可愛かったもん！」

ぐぬぬ…こうなったら、腹一杯食べてやる！

詩織は、そう言いながら、食べるのだった。

「ねえ、詩織は、どこか行きたい所とかなない？」

「うーん、そうだな…」

「じゃあ、フルーツパーラーが、いいかな？」

「フルーツパーラー？」

「果物の専門店で、フルーツを使った、

スイーツが、食べられる、飲食店かな？」

「いいかも！行ってみようよ！」

「うんっ！賛成！」

三人は、フルーツパーラーのお店にやって来た。

「何頼もうかな？あたしは、オレンジジュースかな？」

「ボクは、ブドウジュースだね、詩織は？」

「私は…メロンソーダで！」

三人は、ジュースを飲みながら、会話を楽しむのだった。

「ねえ、詩織、学校生活、楽しい？」

「楽しいよ！もう、すっごく、青春って感じ！」

「アハハ…なにそれ！なんか、面白い回答だね！

あつ、瑞希は、ちゃんと、勉強している？」

「もちろんだよ！ちゃんと、やっているよ！」

その後も、会話は、続くのだった。

## 第九話 朝と夜の一時

高坂風太郎は、今川詩織が作った、朝食を食べていた。

「風太郎くん、少しだけ髭があるよ？」

「剃らなくても、いいの？」

「食べたら、剃るよ、でも、面倒だな……」

「そう言えば、沿ったり、剃らなかつたりするけど、

何か意味があるの？」

「特に意味はねーよ、

伸びたら、剃るだけだし」

「いや、やっぱり、剃ろうかな？」

「私と一つしか、違わないのに、

髭があつたら、オツサンな感じがするよ？」

と、詩織は、首を傾げた。

「まあ、俺、まだ、17歳だし、

髭は、剃った方がいいよな……」

「うんっ！その方が良いよ！」

あつ、恵梨香ちゃんの、朝食、

キッチンに置いてあるから！」

「ああ、そのうち食べるだろうな」

「じゃあ、ごちそうさま」

「はい、ごちそうさま」

風太郎が、学校から、帰って来て、

夜の21時となっていた。

「風太郎さん、遅い！」

「ごめん！」

「夕飯作っていたのに！」

「いや、悪かったって！恵梨香と一緒に食べたのか？」

「食べましたよ！恵梨香ちゃん、すつごく、喜んでいました！

今、寝ていますから、静かにしてくださいね！」

「うん、わかった」

「でも、なんで、遅いんですか？」

「女の子と遊んでいたんですか？」

「俺にそんな趣味はねー」

「そうですよね！風太郎さん、モテる感じが、

しませんからね！」

「大きなお世話だ、からかっているのか？」

「はーっ、いや、風太郎さんと、会話をするだけで、

楽しい気持ちになるんです！自然と！」

「なんでだ？」

「だって…私を助けてくれた、恩人ですから…」

「風太郎さんがいなかったら、私、死んでたかもしれません」

「まあ…人の命を救うのは、案外、いい事かもしれないな」

「はあ…恵梨香といい、詩織といい…」

「会話のペースを掴ませてくれない、女の子は、

どうも苦手だな、俺は…」

「ねえ、風太郎さん」

「どした？」

「詩織は、風太郎の手を握った！」

ギョツ

「急にどうしたんだ？詩織！」

「なんか、元気がないなーって、思ってた！」

「私がハグすれば、いい気分になるかな…って！」

「ならねーよ！」

「じゃあ、今度は、前から、ギョーツと！」

「あーはいはい」

「元気出しました？風太郎くん？」

「出たから」

「単純だなー風太郎くんは！」

「あつ、お風呂湧いているから、早く入ってね！」

「冷めないうちに！」

「わかったから、わかったから」

風太郎は、お風呂に入った。

ハア…体洗って、お風呂に入ったら、妙に柚の香りがするな…

まあ、一つ下の女の子に気を使わせてしまったら、

保護者ツラも、程遠いな、俺は…

って、何、バカなことを考えているんだ、俺は！

## 第十話 三人でデート!

白石杏と桐谷遥、そして、今川詩織の三人は、一緒にデートに出かけることになった。

今川詩織は、桐谷遥の熱狂的な大ファンである。そんな、彼女とデートが出来るなんて…

と、思い、夜も全く、眠れなかったそうだ。

「あつ、詩織!こつち!こつち!」

「杏ちゃん!遥ちゃん!おはよう!」

「ごめんね?待たせちゃった?」

「大丈夫!私たちも、着いたばかりだから!」

「えへへー二人とデートが出来るのが、超楽しみで!」

「詩織、可愛いこと、いう!」

「じゃあ、行こうか」

「うん!あつ、紹介するね、あたしのクラスメイトの、

今川詩織ちゃん!遥の大ファンなの!」

「ど、どうも!はじめまして!今川詩織です!」

桐谷遥様に、出会えるなんて、とても、光栄です!」

「そ、そんな、光栄って、言われても…」

「だって、だって、あの、アイドル、桐谷遥様だよ!

キヤー!近くで嗅ぐと、イイ匂いがする…」

「詩織ったら…」

「だって…憧れのアイドルの遥様と会えるなんて…」

「ふふっ、みのりと会ったら、意気投合しそうだね」

「みのり…ちゃん?」

「私の友達…かな?」

「そうなんだね!今度、会ってみたいな!」

「機会があればね」

「それで、どこ行く?」

「うーん、どうしようかな?」

「詩織は、どこに行きたい?」



「うーん、あつ、カフェかな？」

「そうね、もう、そろそろ、お昼だし、  
行ってみようかな？」

杏、遥、詩織の三人は、カフェへとやって来た。

「何頼む？」

「私は、ココアかな？」

「じゃあ、カプチーノかな？」

「私も、カプチーノで」

杏と遥は、カプチーノを、

詩織はココアを、それぞれ、頼むのだった。

「うーん！美味しい！」

「そうね、少し苦いけど、

美味しく飲めるもんね、ここのカフェって」

カフェから、出た後…

「ねえねえ、次は、どこに行く？」

「あつ、遥様と杏ちゃんって、どんな関係なの？」

「詩織、知りたい？」

「もちろんですっ！」

「そうね、小学生と中学生の頃は、

よく、色々なことで、争っていた仲だよ！」

「へえ、そうなんですね！」

二人は、つまり、ライバルって関係ですね！」

「まあ、そんな感じだね」

「はあ…遥様と、こんな近くで、出会えるなんて…

神様！ありがとうございます！」

「詩織が、遥の熱狂的なファンだったとはね…」

「うん、好きだったんだ、アイドルが、

ううん、桐谷遥が、私は…桐谷遥様が、大好き！」

「えっ、そんなに、私が好きなの…？」

「はいっ！」

「う、うん、ありがとう…」

「じゃあ、ゲームセンターに行こうよ！」

「うん、じゃあ、そこで、遊ぼうか」

「はいっ！よし！青春を満喫するぞー！」

こうして、三人でゲームセンターで、遊ぶのだった。

## 第十一話 五人が出会う時

今川詩織と白石杏が話をしている時だった。

「あつ、詩織！今度、遥に会いに行く？」

「えっ？いいの？」

わーい！遥様に、会えるんだね！」

と、詩織は、興奮気味だった。

「もうー！詩織は遥の事、よっぽど、好きなんだね」

「うんっ！だって、遥様って、

私にとつては、救世主みたいな人だよ…」

「へえ〜そうなんだね、

詩織にとつては、大切な人なんだ」

「はあ…早く、遥様に会いたいな〜」

「もうー！詩織って、気が早いんだから〜！」

こうして、杏と詩織は、

遥とみのりに会うことになった。

「あつ、詩織！こっち！こっち！」

「あつ！杏！それと…遥様！」

「詩織、私のことは、呼び捨てでいいよ」

「そ、そんな〜もつたいない、お言葉を！

わ、私が、遥様の事を、呼び捨てなんて…

そんなこと…」

「じゃあ…ちゃん付けは？」

「えっと…は、遥…ちゃん？」

「言えたじゃん」

「だって、遥様の事…遥ちゃんって…」

「そんなに、遥のことが好きなんだね」

「はいっ！私、桐谷遥様の大ファンです！

もう、推しが近くでいるだけで…」

「その気持ち…わかる！」

「えっ？この子は？」

「あつ、詩織は、初めましてかな？」

花里みのりだよ」

「花里みのりですっ！よろしくね！詩織ちゃん！」

「よろしくお願いします！みのりちゃん！」

「こはねも、もうすぐ、来ると思うけど…」

「お待たせ！」

「あつ、来た来た！」

こはねが、四人と出会った。

「こはねちゃんも、来たんだ！」

「うんっ！大勢いた方が、盛り上がるかな、

って、思っって！」

「この五人で、何する？」

「女子会でもする？」

「いいね！それ！じゃあ、お互いの相棒についてとか、

詩織の事とか、話さないと！」

「それいいね！」

あつ、みのりちゃんは、遥様と一緒に、

ネットで、モアモアジャンプっていう、

アイドルをやっているの？」

「うんっ！ひよっとして、見てくれているの？」

「杏が、言ってくれて、毎回、見ているの！」

遥様のお姿が、美しくて…思わず、興奮しちゃって…」

「詩織って、遥ちゃんのが好きなんだね！」

私も負けてられない！」

「押しがない、生活なんて、想像できない！」

あーいっそのこと、遥様と…結婚したい！」

「えっ？女の子同士だよ？」

「でもでも！私…遥様のような人がタイプで…」

「アハハ…本当に遥のことが好きなんだね」

「でも、遥ちゃんは、私のモノだよ！」

私が、遙ちゃんと結婚するんだから！」

「みのりまで…」

「みのりちゃん…」

「あつ、ごめん！こはねちゃん！遙ちゃん！」

「つい、私まで、熱くなっちゃった…」

「じゃあ、五人で、フェニックスワンダーランドに、

休日に行く？」

「うん！行く！」

「じゃあ、フェニックスワンダーランドの

門前で、待ち合わせね、

今度の日曜日の、午前11時からで、いいかな？」

「うんっ！じゃあ、2人と3人に分けて、

行こうね！」

「あー楽しみ！」

こうして、五人で、フェニックスワンダーランドで、デートすることになったのだった。

## 第十二話 五人で女子会デート!

白石杏、小豆沢こはね、今川詩織、花里みのり、桐谷遥の五人で、デートすることになった!

ちなみに、フェニックスワンダーランドは、夕方に行くことが決まった。

「おまたせー!お店の手伝いをしていて、遅くなっちゃったんだ!」

「大丈夫だよ、今着いたところだから」  
「私も!」

「よかった〜!じゃあ、改めて、今日はよろしくね!」  
「うん!よろしくお願いします!杏ちゃん!」

「もしよかったら…小豆沢さんも、今川さんも、名前で呼んでいいかな?」

「う、うん!」  
「えっ、は、はいっ!」

「じゃあ、こはね、詩織、よろしくね!」  
遥のアイドルオーラが凄まじい…

「えっ?あ、う、うん…!」  
「こちらこそ…遙ちゃん…」

「遥様!じゃなかった…遙ちゃん…」  
「あれ?もしかして、こはねと詩織、照れてる?」

「だ、だって…」  
「遙ちゃんの前だから…」

「わかるよ!こはねちゃん!詩織ちゃん!」  
遙ちゃん、可愛くて、カッコいいよね!

わたしも、今は慣れているけど、  
最初名前で呼ばれた時は、ドキドキしちやっとな…」

「そ、そんなに?」  
「へー、こはねと詩織は、

遥にドキドキしているんだ?」

「あれ？杏？もしかして、ヤキモチ？」  
「えっ？」

「ヤキモチっていうか、詩織はともかく、  
こはねをドキドキさせるのは、  
私の歌だけで、いいの〜！」

と、杏がこはねを抱きしめる。

「あ、杏ちゃん…苦しいよ…」

「ふたりとも、すっごく仲良しだね」

「そうだね、杏は昔から、誰とでも、仲良くなっていたけど、  
ここまでは、べつたりしている、杏は初めてかも」

「そうなんだ…」

「当たり前でしょ？」

だって、こはねは、私の相棒だもん！」

「杏ちゃん…」

「じゃあ、五人で遊びに行こうか、

みんな、今日は楽しもうね」

「うん！」

こうして、五人で、ファッションの服を巡りに、  
ショッピングモールへと、向かうのだった。

服を決めたり、買ったたりした。

「遥コーデに、杏コーデ、どっちも似合う…」

「ありがとう、詩織」

「だって、二人のセンスが良くてよくて…」

あつ、次はセンター街に行ってみない？」

「うん、私が、オススメのお店、教えてあげるから！」

五人で、センター街の、お店で服を選んでいくのだった。

「こういう服を見ていたら、

私の服って、子どもっぽいな…って、思うんだ…

杏ちゃんみたいに、カッコよく着こなしたいけどな…」

「その気持ち！わかる！」

私も遙ちゃんみたいに、カッコよくなりたいなー  
って、思うんだ！」

「でも、二人とも、似合っていると思う！」

「らしきがあるから！」

「ありがとう！詩織ちゃん！」

「なんだか、そろそろ、お腹が空いてきたな……」

「あつ、じゃあ、近くで、お昼にしない？」

「賛成！あつ、それに、みのりちゃんと詩織に、

昔に遥の事を言わないとね！」

「はっ！それ、すっごく聞きたいです！」

「私も！聞きたいです！」

「昔の私か……何だか、照れるし、少し恥ずかしいな……」

「あ、あの！私、昔の杏ちゃんの話、聞きたいな！」

「私も！」

「別にいいけど、昔と、あんまり、変わらないかな？」

「じゃあ、話すと長くなりそうだし、

ご飯食べ終わったら、話さない？」

「うんっ！そうだね！」

こうして、昼ご飯を食べた後、

五人で、公園で、会話をするのだった。



## 第十三話 昔の杏と遥

五人で食事を済ませた後、公園へと向かうのだった。

「じゃ、昔の話だけど、どうしようかな?」

「はい!二人は、いつ知り合ったんですか?」

「小学生の時かな?」

一年生から、六年生の時まで、同じクラスだったんだね!」

「そうだったけど、最初は、

そんなに、話したことは、無かったね」

「五年生くらいから、本格的に、話すようになったんだ」

「じゃあ、その頃から、仲良くなったんだね」

「仲良くっていうか、違いかも?」

杏とは、性格が、全然違うからね」

「だねー違うグループだし、

むしろ、最初は、あんまり、仲が良くなかったかも?」

「え、そうなの?」

「うん、私が最初に遥を意識した時は、

音楽の授業だったかな?」

その時に、遥の歌声を聴いた時かな?

遥は、真面目って言うか:真剣に歌っていたね、

上手くは言えないけど、他の子とは違って、

真剣に音楽をやっているって、感じたんだ!」

「さすが、遥ちゃん!その頃から、ストイックだったんだね!」

「そこまで、大げさなものじゃないけど、

でも、アイドルをやる以上は、

歌は、ちゃんと勉強したかったし、

真剣にやっていたのは、本当かな?」

「すごいね」

「本当だね!遥ちゃんの凄さが、

改めて、わかった気がする!」

「そうだね、だから、私も、負けてられないと思って、

遥に負けなくらいの歌声で、

歌って張り合っていたな…」

「あの時の杏、凄く目立っていたよね、

クラスのみんなで歌うと、杏の歌声だけが、

すごく上手に、歌えていたっけ？」

「そんなに、上手だったんだ！」

「そうだったんだね」

「なんだか、想像できるかも？」

杏ちゃんの歌声、すごく響くから」

「ちよつと、照れるなー」

「でも、私も、杏の歌は、もっと聴きたいって、

思っているよ？」

「そうなの？初耳！」

「まあ、言っていなかったからね」

「えー！もつと、早く言っていよう！」

「今だから、言えるからね」

「いいなあ！私も、遥ちゃんに褒められたい！

小さい頃の遥ちゃんに褒められたい！」

「み、みのり…」

「みのりちゃんって、素直だね！」

詩織に負けなくらい、遥のことが、

好きなんだね」

「はい〜！大好きですう〜！」

「私も！遥様のことになると…！」

「えつと、その音楽の授業で、仲良くなったの？」

「仲良くなったのは、もつと、後かな？」

「うん、それに、小学生の頃の、私たちって、

友達じゃなかったし…」

「どっちかっていうと、ライバルだね」

「ライバル？」

「うん、授業の時のバスケとか、バレエとか、

色々、張り合うようになったんだね」

「うん、体育や音楽の授業の時も、そうだし、

ライバル的な意識が強かったんだね」

「そうだったんだ…」

「二人は、よく色々なことで、競い合っていたのか…」

杏と遥の過去が知れて、三人は、改めて、

杏と遥の凄さを感じるのだった。

## 第十四話 日常の崩壊

風太郎くんを見送った後、

私は、いつも通り、家事を始めた。

「風太郎くん、ちゃんと学校行っているかな…？」

それもこれも、風太郎くんは、

私の事を差し伸べてくれた人だ。

今まで、私はいろんな男性の家を渡り歩いていただけ、  
全員に共通する点があった。

当然だ。

私が、それを交換条件に家を泊めてくれるように、  
交渉したのだからだ。

でも、風太郎くんは、そんな素振りが一切ない。

詩織は自分の容姿を鏡で見た。

(自分で言うのもなんだけど、

私は客観的に、容姿はかなりいい方で、

おっぱいも、おつきい方だと思っただけな…

家には、こんなカワイイ美少女がいるのに！

普通なら、それ位は、思っても、おかしく無いのに…  
わからない…)

私が高坂家にいるには、風太郎くんには、

メリットがあるのか？

家事は、私じゃなくてもいいのに…

でも、海外勤務しているって、言うし…

恋人が出来たり…？

「あはは、優しい人だから、

そんな、簡単に恋人ができる訳ないよね…？」

もし、風太郎くんに、恋人が出来たら…

風太郎くんは、その人を将来的に、抱くのかな…？

でも、過去の事を思い出して、辛い。

家に来てから、思い出したくないことを、  
思い出してしまった…

風太郎くんは不思議で、優しい人に出会って、  
私の心は、休まっていた。

「風太郎くん…」

風太郎くんは、今までの人とは違う。

どこまでも優しく、いつも人の心配ばかりしている。  
だからこそ、私は初めて、

捨てられたくないという、感情が芽生えた。

もつと言え、好かれないとまで、

思っている。

別に愛して欲しいわけじゃなくて…

風太郎くんの恋は、応援したいし、

幸せになって欲しいとも、思っている。

ただ、風太郎くんの中に存在する、

誰かとして、私の事を好いて欲しいって、

願ってしまう。

「はぁ…」

風太郎くんがいないと、

余計なことばかり、頭によぎって来る。

時間がものすごく長いように、

感じて、辛い。

「風太郎くん、早く帰って来て…」

そろそろ、帰る頃のはずだけど、

なかなか、帰ってこない…

「迎えに行こうかな…?」

と、詩織は神山高校の制服を着て、

風太郎を迎えに行った。

しかし、正門の前で衝撃的な光景を目の当たりにする！

風太郎くんの中で、私はやっぱり、思っていなかった。私が気にすることじゃなかった。

帰って、何ともない表情で、

風太郎くんを、迎えよう。

それが、私の仕事だから。

でも…何で、泣いているの？私？

「な、何で…」

嫉妬していた。

生意気にも、風太郎くんのことを、

独占したいって、思っているんだ！

私はバカだ…。

## 第十五話 風太郎と詩織

高坂風太郎は、家に帰り、シャワーを浴びた。

詩織にも、俺にも、

言葉を用意する時間が必要だったからだ。

詩織に見られたとはいえ、

別に恋しているわけじゃない。

それだけは言える。

俺から見たって、

詩織は、カワイイ女子高生で、

もう一人の妹のような存在だ。

こんな時間まで、一人でほっつき歩いて、

最悪、有事が起きたら、どうなるかと、思った。

俺も、ちゃんと、保護者ツラなんかでなく、

詩織と向き合う時だ。

「風呂あがったぞ…し、詩織?!」

そこには、上下下着姿。

ブラジャーとショーツに身を包んだ、

詩織の姿だった。

「服着ろよ…恥ずかしいだろうが!」

「風太郎くん、あのね」

「わかった、話は聞くから、早く着て!」

「聞いて!風太郎くんは、思っていないかもしれないけど、

私…一応、女の子だよね?」

「それは、知っている」

「違うの、そうじゃないの」

「何がだ」

「私ね、スタイル良いし、胸も、おっきい方だと思うんだ。

そんな、女子高生が、下着姿で、

迫ってきているんだど?」

「だから、服を着ろ！お前！」

「えっちしたい？」

「嫌なこった」

「全く？少しも？」

「そういうこと、考えないの？」

「やめ…」

「やだ。これまでの人と、エッチしたんだよ？」

「やめろ！おい、やめろ！」

「答えてくれないと、やだ。」

「興奮しないの？」

「するよ。それで、興奮しない男が、

逆に変な位だ」

「ご、ごめんなさい！」

「なんで、お前が照れているんだよ？」

「いいから、離れろ！」

「う、うん…あのね…その…」

「私、必死だったの。その…どうにかして、

家に帰らず、生きていくのにさ、

女子高生を拾うのになんてさ、

明らかにデメリットの方が大きいじゃん？

警察にバレたら、普通に捕まるじゃん。

だから、その分、大きなメリットが、

ないと、いけないな…って、思っちゃって…」

「それで、メリットというのは、

お前の体にしたって、ことか」

「最初は、凄く嫌だった。

でも、だんだん、求められていくと、

自分が自分でいられるようになっていくみたいな、

必要とされている、そんな気持ちになるの…」

「うん…」

「わかりやすくて、よかった。」



みんな、カワイイとか、気持ちイイとか、  
言つて、私の事を必要としてくれる。

その代わりに、私は家を提供してもらおう。

それで、デメリットの方が大きくなったら、

私は追い出されるの。その繰り返し。

だからね、わからないんだよ：

どうして、風太郎くんは、

私のことを、家に置いてくれるの…かな？

家事だつて、ある程度のことだつたら、

誰でもできるじゃん？

私じゃなくてもさ、どう考えても、

デメリットに釣り合つていないよ。

それなのに、風太郎くんは、優しくてさ、

いつだつて、優しいし、なんか、優しすぎてさ…

私は、どうしたら、風太郎くんに、捨てられないのか、

つて、ついつい、考えてしまう。

風太郎くんにとって、私を置くメリットつて、

何なんだろう…？

わかんないよ…」

「お前…」

「私は本当に頭悪くて、

自分で自分の事をわからない、子どもだからさ、

人から求められてないと、

どうしたらいいのか、わかんないからさ…

だからさ、風太郎くんが、嫌じゃないんだから、

私のこと、抱いてよ。

風太郎くんだったら、いいよ！私は…」

「俺は…」

高坂風太郎の答えは!?

## 第十六話 本当の共同生活

風太郎は詩織を抱きしめた。

「嫌だね、俺は詩織を抱いたりしない。」

正直言つて、すごく可愛いと思う。

女子高生にしては、肉付きや、スタイルも良いし、家事も出来て、最高だ」

「ふふえ…」

「でも、俺はお前に恋はしない。」

俺は好きでもない、女を抱こうと思うつもりは、

一切合切無いし、思わない。

そこに、女子高生も、男子高校生も、

関係ない。俺は詩織の裸を見たいとも、

思わないし、エッチをしたいとも、

微塵にも思わない。

他の奴が、どうかなんて、知らない。

俺は、そういう男だ！わかったか？」

「うん…」

「あー！もう！詩織！さっさと、服を着ろ！」

「あつ！はいっ！」

「お前は俺に何も出来ないって、言ったけど、

そんなことねえよ。」

これまで、俺にとつて、家は飯を食つて、

風呂に入つて、寝る為だけの空間だ。

学校も楽しいし、それでいいと思っていた。

でも、詩織が来てから、

俺にとつての家が変わつたよ。

家に帰ると詩織が、

美味しい飯を用意してくれるし、

風呂も沸いているし。

詩織が笑つて出迎えてくれる。

くだらない会話を、しながら、飯を食って、一人じゃない部屋で寝る。

それだけで、ある意味、居心地の良い、場所になった。早く学校終わんねーかな…

って、時々、思ったりするくらいだ。

だから、俺は詩織に、どうこうして欲しいわけじゃない。

俺は、詩織より、一個上の男子高校生だしな！」

最初から、そう言えば、よかった…

「ここに、居てくれないか、詩織」

詩織が泣き始めた。

「うう…うわわわあああん！それで…いいの？」

「ああ、もちろんずっと、なんで言わない。

お前が帰りたかって思うまで、居てもいいからさ。

無欲で、可哀想な、男子高校生だ、だろ？」

「ふふっ…ありがと…風太郎くん…

一緒にいてあげる！」

「ああ、そうしてくれ」

男子高校生の俺に、女子高生は、

やっぱり、難しい。

ただ、女子高生の詩織にも、

きつと、俺は難しい人なんだろう。

お互いの弱点をさらけ出せた今、

ようやく、真の共同生活が始まったかもしれない。

ある日の雨の日、

傘を忘れた、俺は、どうしようかと、

悩んでいた。

そんな時だった。

「お困りですね？風太郎くん？」

「詩織！」

「傘、家に置き忘れていたから、  
持っ過ぎてちやった！」

「ああ…」

「何か言う事は？」

「あ、ありがとう…」

ずいぶん、生意気になったな…別にいいけど。

「ふ、よろしい、じゃあ、帰ろうか！」

恵梨香ちゃんと一緒にご飯作ったんだ！

風呂も沸いてるからね」

「ありがとう」

恵梨香とは風太郎の妹である。

風太郎と詩織は、高坂家に帰り、

晩御飯を共にした。

「これらも、こんな幸せな日々が続いたらいいのに」  
「そうだな」

続け。俺はそう思うのだった。

## 第十七話 遥とみのりとデート

今川詩織は、花里みのりと桐谷遥と、一緒にシヨツピングデートに出かけていた！

「あの、憧れの遥様とデート！

至福過ぎる！天国だよ！」

「そうだよね！あの遥ちゃんと、

シヨツピングデート！幸せだよ！」

と、詩織とみのりが、興奮状態だった！

「私とシヨツピングなのに、

興奮しすぎだよ？二人とも？」

「だって、だって！遥ちゃんとだよ！」

「遥様の隣にいられるなんて…死んじやってもいい！」

「うん！天に召されそうだよ〜！」

「アハハ…」

と、遥が少し笑い出した。

ある意味では。

「どこに行こうかな…？」

遥ちゃんと一緒に、服を選びたいな！」

「遥様は、センスがいいし、スタイルも良いから、

どんな服でも、似合いちゃいそう…！」

と、やはり、二人は興奮し続けていた。

「二人とも、私の行きつけの洋服のお店に行くよ？」

「遥ちゃんの!?早く行ってみようよ！」

「遥様の、コーディネート、楽しみです！」

「私も！遥ちゃんのコーディネートしてもらいたいな！」

「わかった、わかったから、

そんなに、私の名前を言ったら、変な目で見られるから

「わかりました！」

「わかった！」

と、みのりと詩織は、遥の言う事を聞いて、

一緒に、洋服店へと向かった。

そして、ショッピングモールの一角、洋服屋さんにて。

ここは、桐谷遥の行きつけの場所の様だ。

「ここが、遥ちゃんの行きつけのー!」

「うん。よくここで、服を買っているんだ」

「どれも、遥様に似合いそう!」

「遥ちゃん!早く、私と詩織ちゃんの、」

「コーディネートをして!」

「気が早いね…みのりと詩織を、オシヤレにするなら、」

「気合を入れて、コーディネートしないとね!」

と、遥は、みのりと詩織の為に、

二人分のコーディネートをした。

「可愛すぎる!カワイイが詰まり過ぎているよ!」

「遥様を選んでくれた服、一生、大切にします!」

こうして、遥が選んだ、コーディネートの服を、

みのりと遥は、それぞれ買うのだった。

「遥ちゃん!次は、どこに行く?」

「遥様となら、どこに行っても、幸せです!」

「逆に困るよ…けど、ありがとう。」

そうだね…じゃあ、休憩しない?カフェとかで?」

「カフェか!よーし!じゃあ、行ってみようよ!」

「おーっ!」

三人はカフェへと向かった。

「二人は何にする?」

「私は、カプチーノで!」

「じゃあ、私はココアで!」

と、みのりはカプチーノ、詩織はココアを注文した。

「じゃあ、私は、レモンティーで」

と、三人は、それぞれの飲み物を頼んで、

ついでに、サンドイッチを、一つずつ頼み、

お昼ご飯を食べるのだった。  
満喫した、シヨツピングだった！

## 第十八話 詩織とみのりのデート

ある日の事だった。人気のいない公園にて

今日は、今川詩織と、花里みのりの、

二人のデートの日だった。

「みのりちゃん！今日はよろしくね！」

「うんっ！遙ちゃんのこと、いっぱい、話そうね！」

「遥様の、あれこれ：聞きたいなく！」

「いっぱい、話しちゃうね！」

「楽しみ過ぎる！」

こうして、二人でデートをした。

「遙ちゃんはね、いつも、カッコよくて、

カワイくて、イイ香りとイイ匂いするんだよ〜？」

「うんうん！嗅いで見たら、

遥様の、フワツと、ふんわりとした、

イイ香りとイイ匂いがするんだよね〜？」

「遙ちゃんは、アイドルだから、

どこもかしこも、柔らかいんだよね〜？」

「遥様の身体、触ってみたいな…」

「わたしもー！遙ちゃん、プニプニしてそうだけど…」

遙ちゃんを、プニプニするなんて、恐れ多くて、出来ないよー！」

「うう〜私も、触りたいけど、

何か、その後が、怖くて…」

「そうだよね…」

と、二人で桐谷遙の良さを語りまくった！

「みのりちゃんは、女子校だから、

すっごく、イイ匂いとイイ香りがする！」

「そ、そうかな？」

「だって、私は共学だから、

何と言うか、輩の汚れが付いちやってね…」

「でも、詩織ちゃんは、イイ匂いがするし、



「イイ香りがするし、それに、わたしより、スタイル良いと思うよ?」

「そんなことないけど…でも、胸がおつきくて、プニプニしてるって、言われて、胸をよく友達に揉まれているんだ」

「詩織ちゃんって、胸がおつきいし、お腹周りも、キュツツしているし、

きつと、詩織ちゃんも、柔らかいんだろうな…」

「じゃあ、触ってみる?」

「いいの!?!」

「今なら、誰もいないし」

「じ、じゃあ…おじやまします…」

プニプニ…

と、みのりは詩織の胸を触った!

「や、柔らかい…これが、女の子の、おっぱい!」

「みのりちゃんも、女の子でしょ?」

「そうだけど…こんなに、大きくて柔らかくて、

形のいい胸なんて、遙ちゃん以外に初めてで!」

「ひよつとして、遥様のお着替え、見たことあったりして!」

「そうだよ! 遥ちゃんって、フワツとして、ふんわりしていて…

それに、おっぱいの形もいいし、キレイだし、

おつきくて、柔らかいし…揉みたいって気持ちになっても…

そんな簡単に、触ってくれなくて…

お腹周りも、キュツツしていて、

お尻の形もいいから…遥ちゃんのブラジャーとショーツ姿を見ていたら、

同じ女の子同士のはずなのに、目を奪われちゃって…」

「うう…遥様の、ブラジャーとショーツ姿、

死ぬまで、一度でいいから見て見たい!」

「そうだよね! 詩織ちゃん気持ち、すごくわかる!」

「遥様…! 私にも、体を触らせて!」

「わたしもですっ！遙ちゃん！」

と、二人は妄想全開に膨らみますのだった。